サウジアラビアに暮らして

城 本 征 治*

筆者は2013年からサウジアラビアのラービグにある石油化学会社に勤務している。サウジアラビアという国および当地での生活状況について紹介する。

サウジアラビアは1902年にアラビア半島を制圧したサウド家が建国した王国である。預言者ムハンマドが生誕したマッカと没したマディーナの二大聖地を擁する厳格なイスラム国家であり、国民全員がイスラム教徒である。サウジの国旗はイスラム教の聖なる色である緑地に「アッラーの他に神はなく、ムハンマドはアッラーの預言者である」という信仰告白がアラビア語で、マッカを守護する決意を表す剣が白で描かれている。シャリア（イスラム法）に準拠したサウジアラビアでは、礼拝、断食、巡礼が重要な行動指針となっている。他国と比較して禁止事項が多く、酒と豚肉の飲食、集会が法律で禁止されている。特に女性に対する制限が多く、車の運転、肌および髪の出が禁止されており、外出時はアバヤという黒い衣服で全身を覆うことが義務付けられている。また、男性が家族以外の女性に声を掛けることも禁じられている。これらの制限は外国人にも適用され、ムタワという宗教警察に違反が見つければ注意を受けたり、国外退去を求められる場合がある。

サウジアラビアはアラブ、イスラム世界のリーダーであり、G20の一員でもある。日本の原油輸入量の約3割を占め、日本の輸出入総額の第7位であり、日本とは経済的に重要な関係にある。この一方で、サウジアラビアの在留邦人は2013年現在で835名であり国別で56番目の多さである。進出日系企業数は105社であり39位の位置付けである。サウジアラビアの名目GDPが19位であることと比較すると、日本との経済的、人的交流には発展の余地が十分にある。

サウジアラビアは日本を含むOECD諸国の国民が入国ビザを必要とする数少ない国の一つである。観光ビザが発行されておらず、巡礼ビザもしくは就労ビザを取得する必要があるが、巡礼ビザはムスリムしか取得できないため、

筆者は就労ビザを取得してサウジへ入国した。ビザ取得にはサウジ側雇用主からの招聘状、雇用契約書が必要である。このためサウジの政府、企業からの招聘あるいは就労をしない限り、ほとんどの日本人はサウジへ入国できない。ビザ申請にはこの他に健康診断書、最終学歴の卒業証明書、日本の会社が発行し商工会議所認証印を押印した推薦状などが必要となる。サウジ入国審査には時間が掛かり、数時間待たされるケースもある。幸いにして筆者は毎回10～20分程度で入国できている。サウジへの入国後はイカマという居住許可証を取得する必要がある。イカマ取得後は雇用主へパスポートを預けなくてはならず、イカマとパスポートの同時所持は許されていない。これは脱走防止のためといわれている。サウジから出国するには出入国ビザを取得する必要がある。ビザ取得までは理由にかかわらずサウジからは出国できない。このようにムスリム以外の外国人の入出国は厳格に管理されている。これは非ムスリムの流入によるイスラム教に準じた文化、風紀への悪影響防止の他、外国人の不法就労への対策でもある。

筆者の生活するラービグは紅海に面した人口4万人程度の小さな町であり、ほぼ北回歸線上に位置する。感覚的な四季は、夏、厳しい夏、夏、初秋である。7、8月は最高気温が45度程度まで上がり非常に暑い。水道の栓を開けるとシャワーを浴びられるほどの温水が出てくる。この一方、12月や1月の朝や夜は10度台まで下がり肌寒く感じる。年間を通じて晴天であり日差しが強烈なため、半袖で屋外に居ると肌が痛くなるほどである。ある添加剤メーカーの資料によると、サウジアラビアの紫外線の強さは日本の2倍である。このため、外出することが少なく短距離の移動でも自動車を利用する。一方、ビル内の空調は20

* Shiromoto, Seiji

Marketing & Product Development, Rabigh Refining & Petrochemical Company

PR 206, P.O. Box 666, Rabigh 21911, Kingdom of Saudi Arabia

shiromoto@sc.sumitomo-chem.co.jp

2015.3.24 受理

数度と低く設定されており日本より快適に過ごせる。

筆者はコミュニティとよばれる居住区に住んでいる。周囲はフェンスに囲まれ会社のセキュリティが警備しており、安全な環境である。一般の居住区は外国人専用であるが、筆者の住む居住区には多くのサウジ人が生活している。このため、アバヤの着用などイスラム教の尊重が義務付けられている。また、モスクもあり毎日5回のアザーンという礼拝の呼び掛けが大音量で流される。一般の商店は礼拝時間にシャッターを閉めて営業を停止するが、幸いにして筆者の住む居住区にあるスーパーマーケットは営業を続ける。礼拝時間は季節によって異なるが、夏の最後の礼拝は夜8時過ぎである。サウジ人は最後の礼拝を終えてから夕食を摂ることが多く、子供も含め夜型の生活を送っている。

サウジアラビアに限らず、イスラム社会の特徴を表すIBMという言葉がある。Iはインシャッラーの頭文字であり「神の思し召しのままに」という意味である。イスラム社会では約束とは未来予測であり神の領分と考えられており、人間が軽々しく口にするのは良くないとされる。サウジ人は前向きな意味で使うが、約束が守られない場合がある。次にBはブクラの頭文字であり「明日」を意味する。実際には「少なくとも今日ではないが、いつになるかわからない」という意味で使われる。最後にMはマレーシュであり「気にするな」、「ごめんなさい」などの広範な意味がある。サウジ人はおおらかで付き合いやすいが、IBMに象徴されるように約束や時間の厳守が期待できない場合がある。

ラマダン＝断食というイメージが強いが、イスラム暦の第9番目の月を意味し、一年で最も神聖な月である。ムスリムはラマダン期間中に断食という修行を通じて貧しい人々の気持ちを経験し、助け合いと思いやりの精神を強化する。日の出から日没までの間、禁欲的な生活が強制され、喫煙、薬の摂取、音楽鑑賞、性交も禁じられる。これらは公共の場では外国人にも強要され、これらを守れない外国人は国外退去を含めた処分が行われることがある。イスラムの教えでは妊婦、老人、病人、旅行者は断食を免除されるが、ラマダン後に免除した日数に相当するだけ断食しなければならぬ。ラマダン期間中は労働時間が短縮され正午から午後1時頃に終業する。また、断食により集中力、仕事の効率が低下するため、ラマダン中の仕事の進捗は遅くなる。終業後は自宅へ戻りコーランを読んだり寝て過ごすのが一般的である。日没後はイフタルという断食明けの豪華な食事が供され、友人を招待して賑やかに交流することが多い。その後も食事、お祈りなど行い、サフルという日の出前の食事を摂る。サウジ人はラマダン期間中は昼夜逆転した生活をするため、日中はほとんどの店舗が閉まっており夜間に営業する。ラマダン期間中は毎日が日本の正月のようであり、心待ちにしているサウジ人が多い。

サウジでは公共交通機関がほとんどなく移動手段は自動車のみである。自転車やバイクを見かけることはほとんどなく、歩行者用通路もあまり整備されていない。運転マナーは悪く、速度超過、信号無視、ウィンカーを出さない場合が多い。これは交通教育と取締りが不十分なことが原因と思われる。運転免許の筆記試験はあるが、標識に関するごく簡単な質問だけである。筆者が実地試験を受けた際、サ

ウジ人は直線を50mほど運転ただけで安全確認をすることなく合格した。人口当たりの交通事故死亡率は世界一であり、入院患者の3分の1が交通事故による負傷といわれる。この対策として道路にスピードバンプが設置されている。また、速度違反、一時不停止取締り用のカメラも設置されているが、効果は十分とはいえない。しかしながら、日本のような交通渋滞はあまりなく通勤時間は短い。また満員電車での通勤を強いられることもない。

サウジの一般的な食事はアラブ料理であり、鶏、羊、牛の肉がよく食べられる。代表的なものとしてカプサ(Kabsa)があり、バハラット(Bharat)というミックススパイスで炊いた米の上に羊や鶏を盛り付けた料理であり美味である。量が非常に多く、皿の周りを数人で囲み手で取って食べる。魚もよく食べられており主な料理法は唐揚げである。また、ラクダも食べられるが、近年のMERS(中東呼吸器症候群)の感染源がラクダと特定され、料理が供されることは無くなった。また、ホブズ(khubz)という薄く焼いたパンや米が良く食べられている。サウジでは米は生産されず、主にインドから輸入されている。最近では欧米のファストフード店の出店が著しく、サウジ人で賑わっており、特に夜間は若年層のソーシャルスペースと化している。

サウジアラビアの抱える社会問題を紹介する。サウジは世界最大の石油埋蔵量を有し、石油の生産、輸出ともにトップクラスである。歳入の9割が石油関連である石油依存国家である。しかし、近年の国内石油消費量は生産量の3割近くに達している。この原因として、人口増加、ライフスタイルの変化、水および電力の浪費が挙げられる。近年の人口増加率は2%台と高いが、これはイスラム教により避妊、堕胎が禁止されていることと、外国人労働者の移民が多いことが原因である。また、ライフスタイルの変化により自動車、エアコンの普及が進み、ガソリンと電気の消費量が急増している。ガソリン価格は石油収入を国民へ還元するため1リットル当たり0.12USDに設定されており、ベネズエラに次いで世界で2番目に安い。このため一人当たりのガソリン消費量が世界で4番目に多い。電気は石油および天然ガスで発電されているが、ガソリン同様に政府により製造原価以下に設定されている。夏季の家庭電力消費の70%がエアコン用であり消費量が増加し続けている。水の大部分は電力による海水淡水化プラントで製造されているが、安価に設定されており水の浪費が石油資源の浪費を助長している。以上の原因により、一人当たりの石油消費量は米国の1.6倍、日本の2.8倍で世界のトップクラスである。英国のチャタムハウスやサウジアラビアのジャドワー投資会社の報告によると、現状のまま何の対策も施さずにエネルギー消費が増加すると、2030年代に石油輸入国に転じると予想されている。また、国営石油会社サウジアラムコ社は、国内のエネルギー効率が改善されなければ、輸出能力は2028年までに半減する可能性がある」と述べた。国連によれば石油製品と電力料金に対する補助金はGDPの10%に相当する。石油消費量の増加による輸出量減少、財政負担に対策を講じなければ、財政赤字に転落する可能性が高い。政府は増加し続ける国内エネルギー消費の対策として、発電燃料の石油からガスへの転換、原子力発電や

太陽光発電を中心とした再生可能エネルギー開発を推進し始めている。

オイル・ブームに沸き人口が少なかった頃は、サウジアラビアに失業問題はなかった。大部分のサウジ人は拡大する行政機関の公務員として採用され、楽な仕事で高給を得ていた。しかし、1990年代には行政とインフラの整備が一段落し新規雇用の機会が減少し、さらに急激な人口増加によりサウジ人の失業率が高まった。サウジ総合投資院によると人口の30%が15歳以下で、年齢中位数は26歳と非常に若い。中央統計情報局は15歳以上の失業率が約12%と発表しているが、IMFによると15歳から30歳までの失業率は30%程度と推測されている。社会政策の一環として優遇されている公務員がサウジ人に人気が高いが、すでに余剰人員を抱えた状態であり受け入れが困難である。これに対して民間企業では外国人労働者の比率が高く、熟練の不要な肉体労働や単純労働が多い。政府は失業対策として民間企業に対してサウダイゼーションとよばれる一定比率のサウジ人の雇用を義務化した。しかし、サウジ人は対外的に認められ賃金の高い職種を好む。また、外国人労働者が就いている職種に対する偏見があり、避ける傾向にある。一方、サウジ人の実務能力や経験に対して、希望する職種、賃金に対するギャップが大きいため、民間企業もサウジ人の雇用に苦慮している。豊かな親の世代からの手厚い保護や政府の福祉政策により、働かなくても生活ができるため労働意思の希薄な失業者が少なくない。

サウジアラビアは世界最大の石油輸出国として急速に発展した国であり、近代教育の歴史は新しく、教育制度が確

立されたのは1953年である。教育の基本理念をイスラム教の教義に置いている。宗教教育が教育時間の大部分を占め、指導方法はコーラン朗誦などの暗記教育が基本である。科学の宗教への調和が求められ、両者に矛盾がある場合は、宗教理論の不十分な理解あるいは学術理論の正当性の欠如が原因と解釈される。サウダイゼーションを課されている民間企業からは、理数系など自然科学のカリキュラムの充実、創造的な思考を育てる教育体制の整備が要望されている。サウジ政府は教育体制が民間企業の要望する人材に適応できず、失業問題の解決に至らない原因と理解し始めた。近年では歳出の25%が教育、訓練に充てられており、民間企業の職業訓練費用を負担している。また、教育費用は教科書も含めて全て政府からの補助により無料である。大学へ進学すると奨学金が給付され、海外へ留学した場合は費用の全額が政府により支援される。このように教育制度の改革が行われてはいるが、イスラム的解釈を要求する宗教界と整合性を保つ必要があるため、改革はその途上にある。

筆者にとってイスラム文化圏での生活は始めてであり、赴任当時は驚くことが多かったが、サウジ人からイスラム教やサウジアラビアの文化、風習について学び、多くを理解できた。サウジ人の気質は日本人に似た側面があり親しみやすい。また親日家が多い印象を受ける。アラブの格言に「思想は空、言葉は雲、行動は雨」がある。砂漠気候のアラブ地域では雨はまさしく「恵みの雨」である。今後、サウジアラビアの長所に目を向け積極的に発信、行動することで、両国および自身の発展につなげたい。